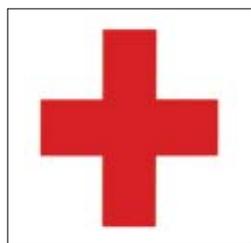


皆さんは、白地に赤い色の十字マーク(「赤十字」)を知っていますか？病院や医療を表すマークだと思っている人も多いかもしれませんが、「赤十字」は、戦争や紛争で傷ついて苦しんでいる人々を守り、赤十字社の一員として公平な立場で活動していることを示すために、国際的に取り決められた重要なマークなのです。

その始まりは、赤十字の創設者であるアンリー・デュナンが、「傷ついた兵士はもはや兵士ではない、人間である。人間同士として尊い生命を救わなければならない」と訴えたことによります。デュナンの信念に強く心を動かされ、日本に博愛社(後の日本赤十字社)を設立したのが佐野常民でした。



■赤十字マーク
このマークを掲げた病院や救護員には、攻撃してはいけないと国際法や国内法で定められています。
(日本赤十字社 提供)



(日本赤十字社 提供)

■アンリー・デュナン
(1828-1910)
スイス人の実業家で第1回ノーベル平和賞を受賞。

□世界に目を向け、さまざまな分野で活躍したマルチ人間

赤十字の活動に半生を捧げた佐野常民とは一体どんな人物だったのでしょうか。一言で言うなら、政治・産業・科学など、さまざまな分野でリーダーシップを発揮したマルチな才能の持ち主でした。

出身は現在の佐賀市川副町で、1822(文政5)年に佐賀藩士下村家の五男として誕生。10歳の時、藩医(佐賀藩に仕える医者)を

務める佐野家の養子となり、医者になるため勉学に励みます。藩校弘道館で学び、大阪や江戸に出てからは緒方洪庵や伊東玄朴らに、西洋の学問や医学を学びました。

31歳の時、佐賀藩が理化学研究のために設けた精煉方の責任者となり、蒸気船やガラス、電信機など幅広い研究の指揮を執りました。常民の出身地である川副町早津江に、佐賀藩が三重津海軍所を設立した時は、監督として航海や造船の実地訓練を行い、日本初の実用蒸気船「凌風丸」を完成させました。



(日本赤十字社 提供)

■パリ万博に参加した1867年ごろの佐野常民。

1867(慶応3)年には、佐賀藩の代表としてフランスで開催されたパリ万国博覧会に参加しています。万国博覧会とは、新しい文化の創造や科学・産業技術の発展などを目的に、世界各国に技術や製品を紹介する催しです。常民は、このパリ万博で赤十字の存在を知り、敵味方に関係なく負傷した兵士を平等に救護するという理念に心を動かされます。また、1873(明治6)年に訪れたオーストリアのウィーン万博では、さらに進歩した赤十字の活動を目の当たりにし、赤十字のような人道的国際組織の発展こそ、文明進歩の証拠だと感じました。

□決して諦めない。信念と情熱をもって博愛社を設立

明治政府が誕生して間もなくすると、旧武士階級である士族の不満が各地で暴発し、1877(明治10)年、九州で西南戦争が起こりました。西郷隆盛が率いる西郷軍と政府軍との戦いで、戦場となったの

は現在の熊本県・宮崎県・大分県・鹿児島県です。明治時代の初めに起こった土族反乱の中では、最大規模となる戦いでした。

明治政府で重要な役割を担っていた常民のもとに、激しい戦いで両軍とも多数の死傷者が出ていることが伝えられ、常民は今こそ赤十字が必要だと考えます。早速、同じ元老院議員だった大給恒とともに、博愛社設立嘆願書を政府に提出しますが、その願いは受け入れられませんでした。人として、傷ついた人間が目の前にいれば手を差し伸べるのが当然ですが、当時は、国家に反乱を起こした敵をわざわざ助けることに、納得できない人が多かったようです。

それでも常民は諦めず、最大の激戦地だった熊本まで行き、政府軍の総指揮官だった有栖川宮熾仁親王に嘆願書を直接提出します。常民の熱意によって即日許可をもらうことができ、これが日本の赤十字事業の幕開けとなりました。



■各地の軍団病院などで行われた博愛社の救護活動。

(日本赤十字社 蔵)



■熊本洋学校教師館にて、博愛社設立が許可されました。

(日本赤十字社 蔵)

□未来に継承される常民の精神

常民が掲げた博愛精神とは、赤十字と同じく、敵味方の区別なく、全ての人を広く平等に愛するということです。1886(明治19)年に日本がジュネーブ条約に加入したことで、翌1887(明治20)年、博愛社は日本赤十字社に改称。正式に国際組織としての仲間入りを果たすことになり、常民は日本赤十字社の初代社長に就任しました。

常民は、赤十字社の精神を広めるべく、精力的な活動を行いました。ただひたすらに「尊い命を救いたい」という思いだけで突き進んでいったのです。そんな熱い志は、災害や戦時の中、助けを必要とする人がいれば手を差し伸べて救護にあたる日本赤十字社の理念として、今もしっかりと受け継がれています。

常民は「進徳脩業」という言葉を好んだと言われています。この言葉は、よく学び、よい行いをして立派な人になることという意味ですが、その精神は、常民が生まれた地域の人々の間にもしっかりと根付いています。その一つが、佐野常民記念館の運営を手伝うボランティアスタッフの存在です。また、川副町にある博愛少年団もボランティア活動をしています。



■佐野常民が書いた「進徳脩業」。

(佐賀県立佐賀西高等学校 蔵)

考えてみよう!



公平かつ中立であるためには、どのようなことが大切だろうか、考えてみよう。



- 「佐野常民記念館図録」佐野常民記念館
- 「さがの人物探検99+you」佐賀市教育委員会
- 「日赤の創始者 佐野常民」吉川龍子 著